



の中の

子どもたち

第22回 エール!

—マンネリが感動を呼ぶ—

川崎 二三彦

ストック・シチューション

本作、何か深く考えさせられるとか、新しい発見があったというようなことはなかったけれど、「ああ、映画館に足を運んで良かったな」と素直に思えた映画だった。ただし、どこが良かったのか、なぜそれが良かったのかを書き付けようとした途端、それがほとんど無意味なことだと気づき、書くことが何もない。何しろストーリーは単純明快で、感動したといっても、見終わってみれば結末はほぼ予測できるものでしかなく、それ以上何かを付け加える必要がないのである。

*

そうして考えていて、ふと思い出し、書棚から引っ張り出した本がある。井上ひさしと平田オリザが対談した「話し言葉の日本語」(小学館)だ。読んだのは、もう十数年前のことだけれど、記憶を辿って改めてページをめくり、井上ひさしが語っていた次の一節を探し出した。

「外国には『ドラマドクター』という人がいます。その戯曲のどこが悪いかを指摘する人です。彼らがよく使うボキャブラリーのひとつに『ストック・シチューション』という言葉があります。日本語に訳すと、『お決まりの状況』。人類にはいままで何千年もかかってためてきた、おもしろい人間関

シチューションです。たとえば、『三角関係』とか『偶然と誤解』とかいったものがそうです。野望に燃える若者が出世の階段をかけのぼるというのもそうです」

井上ファンである私は、彼こそ、こんな、いわばマンネリの極致のようなストーリーと決別し、奇想天外な発想の小説や戯曲をたくさん書いた、また書こうとした作家だろうと考えていたのだけれど、実は違う。対談の続きを見てみよう。

「このようなパターン化された人間関係や出来事を、文学や演劇が引き継いで再創造していきたいというのが、僕の基本的な姿勢です」

なんだ、マンネリを否定するのではなく、それを前提にして作品を生み出していたのかと驚いていたら、それは何も井上ひさしに限られたことではないという。

「チャーホフの『三人姉妹』は愛の三角関係ですし、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』は偶然と誤解でできている(笑)」

成功の秘訣

この部分を再読して、ようやく分かった。本作のパンフレットには、「耳の聴こえない家族の中、唯一聴こえる少女には歌の才能があった」「少女の夢と家族への愛を乗せた歌声が起こした、最高の奇跡とは？」などといった惹句が踊っていて、「簡単には起こりそうもない物語なんですよ」とささやいているけれど、実はこれ、何千年も前からある「お決まり」の映画だったのである。

ただし、そんな映画に人が感動するには、条件がある。今回は井上ひさしに度々お世話になるのだけれど、先の対談で、彼が戯曲を書く前につくるたくさんのノートのことを尋ねられ、こんなことを言う。



係や出来事がある。これがストック・

「この紙に書かれたものは、あくまでも、ただのストーリーですから、これを立体に組み上げるプロット作業が必要になります」

加えて、こんな発言もある。

「戯曲を書こうと思ったときに、(中略) テーマや思想や構想を最初にもって書き出すと、必ずと言っていいほど、失敗します。いや、これは、ほんとうです」

普通のコメディ

「よくできたシナリオ、俳優達の熱演に支えられながら、ラルティゴ監督は見事に私たちを楽しませ、さらには感動さえ与えてくれる」

フランスの映画雑誌「ポジティブ」は、本作品をこのように評したらしいが、今まで述べてきた井上ひさしの蘊蓄に耳を傾けるならば、この評はなるほどうなずける。

MovieWalkerなどで事前に情報を得たとき、もしかするとお涙ちょうだいの安っぽい映画かも知れないと、実は最初敬遠していたのだけれど、それが裏切られ、「ああ、見て良かったな」と思った理由は、ストーリーの見事さなどではなく、シーンの一コマ一コマが立体的で楽しく作られていること、そして何より、人類が「いままで何千年もかかってためてきた、おもしろい人間関係や出来事」が繰り返されることで、安心していられた、つまりは、自然と湧き上がる期待感をそのまま満足させ、見たかったとおりに展開する映画だったからにほかなるまい。

この映画、キーワードはあくまでも



「聴覚障害」だ。ところが、不思議なことに、この手の映画で常に生じる「障

害問題」だとか「障害者」を考えさせられ状態がなく、いとも簡単にそこから自由にしてくれる。いわば、普通のコメディに過ぎないのである。好感が持てるのは、恐らくこの点にあるのだと思う。

とりわけ、父の役どころがツボにはまっていて可笑しい。

「私が当選したら、あなた達のような障害者を全力で支援します」

などとおべんちゃらを言う村長に、「クソ野郎」と(手話で)毒吐き、周囲の反対を押し切って自ら立候補するなんて痛快だし、娘が歌の才能を見いだされ、家を離れてパリの音楽学校に行くという話が持ち上がると、急なことに母が狼狽し、「家族の手伝いは？」などとやり合う中で、迷う娘に父が答える。

「おまえなしでも平気さ」

考えてみれば、どの家族だって、多かれ少なかれ変化には痛みが伴うものだ。この家族では、唯一耳の聴こえる娘が、外部とのコミュニケーションを一手に引き受けていたのだから、確かに不便をかこつのはやむを得ない。けれど

「だからといってそれが何だ」

「どこの家でもあることだろ」

こんな雰囲気が、いいのである。

* 2014/フランス

* 鑑賞データ 2015/11/03 京都シネマ

* 公式 HP <http://air-cinema.net/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/39336>

第1回	プレシャス	* 題名を click すると本文へ ジャンプします。
第2回	クロッシング	
第3回	冬の小鳥	
第4回	その街のこども	
第5回	八日目の蟬	
第6回	いのちの子ども	
第7回	ラビット・ホール	
第8回	サラの鍵	
第9回	少年と自転車	
第10回	オレンジと太陽	
第11回	孤独なツバメたち	
第12回	明日の空の向こうに	
第13回	旅立ちの島唄	
第14回	くちづけ	
第15回	もうひとりの息子	
第16回	メイジの瞳	
第17回	ファイ	
第18回	悪い田のマーニー	
第19回	ショートターム	
第20回	真夜中のゆりかご	
第21回	きみはいい子	